天然ガスを主な動力源にした大型の活魚水槽＝京都市内の大水京都支社

動力源に天然ガス

活魚水槽を開発

徳島魚類やデジタル・テクノ

コスト削減 環境面も配慮

水産物卸の徳島魚類（徳島市）、産業用機器設計製造のデジタル・テクノ（同市）などは共同で、天然ガスを主な動力源にした大型の活魚水槽を開発した。電気を使う従来の装置に比べ、ランニングコストを大幅に抑えるとともに環境負荷の低減も実現できる。紫外線とオゾンによるダブル殺菌システムなども備えており、環境面や衛生面に配慮した付加価値の高い装置として、流通業者や飲食店などの需要開拓を進めていく。

徳島魚類が元請けとなり、水槽の設計や施工を担当。デジタル・テクノが水温やポンプの稼働状況を遠隔管理できる制御装置をつくった。冷却は大阪ガス（大阪市）の天然ガスを動力源にした装置を、海水の濾過はヤマハ発動機（静岡県磐田市）製の完全密閉式圧力濾過装置を、それぞれ採用。海水の殺菌は、紫外線とオゾンを合わせて用いることで効果を高め、より安全な海水を供給できる仕組みにした。

京都市中央卸売市場にある水産物卸の大水京都支社の依頼を受け、容量六十トン規模の第一号機を担当。六月から稼働させている。同支社の試算では、電気を主な動力源にした従来の装置に比べて初期経費は約二百万円の負担増になるものの、日々のランニングコストは年間で五十～六十万円ほど削減できるという。二酸化炭素の排出が少ない天然ガスを使うことも効果ガス削減への取り組みにもなるとしている。

徳島魚類は、鮮魚仲卸や配送といった本業のノウハウを生かし、商品納入先の個別ニーズに対応した水槽設備の設計や施工も手掛けている。今回の水槽設備に対しても既に引き合いがあるという。一新実社長は「水槽設備はこれまで社内の一事業部門として手掛けてきたが、今後は分社化するなどして事業拡大を検討したい」と話している。

議定書に定められた温室